

令和元年度 広島平和記念式典派遣事業

平和大使 活動報告書



「非核平和都市宣言」（平成18年12月25日）

美しい自然を愛し平和を願う心は人類共通のものです。

これを根底から揺るがし、地球環境と人類の平和を脅かす核兵器は絶対に容認できません。

世界でただ一つ悲惨な体験をした被爆国の国民として、核兵器の廃絶と非核三原則をいま一度世界に向け強く訴えていかなければなりません。

人と自然と産業が調和しながら進化するまちづくりをめざしている燕市は、新市誕生を機として、決意を新たに世界の恒久平和を願い、ここに「非核平和都市」を宣言します。

燕 市

目 次

I	広島平和記念式典派遣事業実施にあたって・・・・・・・・・・	1
II	ごあいさつ・・・・・・・・・・	2
III	令和元年度 広島平和記念式典派遣事業 日程・・・・・・・・・・	3
IV	研修レポート・・・・・・・・・・	4
	① 出発式 平和大使決意表明	
	② 平和大使レポート	
	燕中学校 中山 優佳	
	小池中学校 小倉 生意	
	燕北中学校 沼澤 すみれ	
	吉田中学校 相田 漱哉	
	分水中学校 廣瀬 葵	
	③ 平和への誓い in 燕	
	④ 引率者レポート	
	学校教育課 指導主事 小池 克行	
	学校教育課 指導係 主事 小川 綾花	
V	派遣事業の概要・・・・・・・・・・	27
VI	広島平和記念式典派遣事業の様子・・・・・・・・・・	29

広島平和記念式典派遣事業実施にあたって

燕市長 鈴木 力

広島・長崎の被爆の悲劇から、今年で74年が経ちました。戦争を知らない世代も増え、悲惨な記憶を風化させることのないようにしなければなりません。私たちは、今日、享受することのできる平和と繁栄が、戦争による尊い犠牲の上に築かれているということを、世界でただ一つの被爆国の国民としてしっかりと理解し、後世に永遠に語り継いでいくことを大切にしなければなりません。

世界に目を向けてみますと、地域紛争や戦争、あるいはテロ行為によって、今もなお多くの人々の尊い命が失われています。

燕市は、核兵器のない真の世界恒久平和が実現することを願い、平成18年12月25日に「非核平和都市」を宣言しました。そして、平成20年度から広島平和記念式典へ燕市内中学校5校の代表生徒の派遣を始め、今年で12年目を迎えました。

生徒たちは、平和大使として、各学校で制作した千羽鶴の奉納、広島平和記念資料館や原爆ドームなどの見学、被爆体験講話の聴取、とうろく流しなどを体験してきました。そして、9月1日の報告会では、生徒たちが、直接目と耳で学び、肌で感じてきたこと、そして一人一人が考えた「平和を守るためにできること」を市民の方々へ発表してくれました。

戦争の体験を語れる方が減ってきている中で、直接話を伺い、資料などを目にしてきたことはとても貴重な体験だったと思います。平和大使たちには、これからも、体験し、感じたことを学校、家庭、地域、そして世界へ向けて発信するとともに、平和の大切さ、命の尊さについて考える機会をさらに広げ、自らできること考え、積極的に行動してほしいと思います。まずは、相手の気持ちを思いやること、人の痛みを理解することが、その第一歩だと思います。今後の平和大使の活躍に期待しています。

終わりに、今回の事業実施にあたり多くの方々からご協力を賜わりましたことに、心から御礼を申し上げます。

ごあいさつ

燕市教育委員会教育長 遠藤 浩

燕市では、非核平和の推進と平和学習活動の一環として、平成20年度から毎年、市内5つの中学校の代表生徒を平和大使として広島へ派遣しています。平和大使は、広島平和記念式典へ出席するとともに、各中学校の生徒たちが、戦争の犠牲となられた方々の冥福をお祈りし、平和への願いを込めて作った千羽鶴を「原爆の子の像」に奉納してきました。

私たちは、広島原爆投下について、学校での学び、テレビ、新聞などでの報道から、亡くなられた方の数や当時の惨状などを知っています。ですが、実際に広島市を訪ね、そこで触れる、人、もの、こと、のぬくもりと広島平和記念式典の空気は、教科書や新聞などの文字や写真だけでは伝わらないことを、私たちに教えてくれます。

今回、平和大使として広島へ派遣された5名は、五感を働かせ、現地を訪ねたからこそ分かること、感じられることなどをたくさん吸収してきました。戦争や平和について考え、この平和を守っていくために、できることから行動し、未来をつくろうという思いが、この報告書を読んでいただければ伝わるものと思います。

終戦から74年が経ち、その歴史を私たちに伝えてくれる語り部の方も年々少なくなってきました。貴重な体験をしてきた平和大使の皆さんには、戦争や核兵器の使用という過ちを二度と繰り返さぬよう、学んだこと、感じたこと、そして平和の尊さを未来の世代にしっかりと伝承して欲しいと願っています。

最後になりますが、広島平和記念式典派遣事業を開催するにあたり、平和大使の皆さんを快く送り出してくださった保護者の方々、ご支援、ご協力いただいた方々に感謝を申し上げ、ごあいさつといたします。

令和元年度 広島平和記念式典派遣事業 日程

事前研修 7月10日(火)

18:30 ~ 20:00

- ◇ 参加者・引率者自己紹介
- ◇ 広島平和記念式典派遣事業について
 - ・事業概要説明(目的・活動内容等)
 - ・当日までの準備



1日目 8月5日(月)

- ◇ 出発式(燕市役所) 6:50 ~ 7:10
- ◇ 移動(燕三条~広島) 8:02 ~ 14:26
- ◇ 被爆体験講話(広島市青少年センター) 15:30 ~ 16:50
- ◇ 平和記念公園 17:00 ~ 19:15
 - ・千羽鶴奉納(原爆の子の像)
 - ・広島平和記念資料館見学
- ◇ ホテルにてミーティング 20:40 ~ 20:45

2日目 8月6日(火)

- ◇ 広島平和記念式典参加 8:00 ~ 8:50
 - ・原爆死没者名簿奉納
 - ・献花、黙とう
 - ・平和宣言(広島市長)
 - ・平和への誓い(子ども代表)
 - ・来賓あいさつ
 - ・平和の歌(合唱)
- ◇ ヒロシマの心を世界に2019見学 9:00 ~ 11:00
- ◇ 献花 11:00 ~ 11:30
- ◇ 広島平和記念公園 12:45 ~ 13:45
 - ・ボランティアガイドによる公園内見学
- ◇ 広島市舟入高等学校演劇部による演劇鑑賞 14:00 ~ 15:00
- ◇ 広島原爆死没者追悼平和祈念館見学 15:20 ~ 17:00
 - ・被爆体験記朗読会参加
- ◇ 灯籠流し参加 18:00 ~ 18:30
- ◇ ホテルにてミーティング 20:30 ~ 20:35



3日目 8月7日(水)

- ◇ おりづるタワー見学 10:00 ~ 11:20
- ◇ 移動(広島~燕三条) 12:06 ~ 18:48
- ◇ 解散(燕市役所) 19:10



研修レポート

① 出発式 平和大使決意表明

② 平和大使レポート

燕中学校	中山	優佳
小池中学校	小倉	生意
燕北中学校	沼澤	すみれ
吉田中学校	相田	漱哉
分水中学校	廣瀬	葵

③ 平和への誓い in 燕

④ 引率者レポート

学校教育課 指導主事	小池	克行
学校教育課 指導係 主事	小川	綾花

令和元年度 広島平和記念式典派遣事業 出発式 平和大使決意表明

■燕中学校：中山 優佳

私は、この広島派遣で、原爆や平和についての学びを深め、広島でしか学べないことをたくさん学び、自分が感じたことや、まとめたことを少しでも多くの人に伝えられるように頑張ります。

■小池中学校：小倉 生意

私は、原爆が投下された地へ初めて行きます。戦争は多くの人を苦しめたという事実を自分の目で確かめ、戦争の犠牲者の方々が悲しまない日本の未来を作るために広島で学んだ平和への導きを一人でも多くの人に伝えられるように頑張って来たいと思います。

■燕北中学校：沼澤 すみれ

一生に一度、できるかできないかの貴重な経験なので一つ残らず吸収して来たいと思います。そして、私の身近な人や県外の人にも伝えていきたいです。

■吉田中学校：相田 漱哉

私は、この派遣を通して戦争によって原爆が投下された広島で当時の状況や、被爆者の思いなどを深く学んできたいと思います。また、学んだことをより多くの人へ分かりやすく伝えていきたいです。

■分水中学校：廣瀬 葵

私は、この広島派遣で、現地でしか学べないことをしっかり学んで来たいと思います。また、身近な人にしっかり伝えたいと思います。

1. 事前学習「原爆の被害・惨状」

(1) 放射線による被害

1945年8月6日午前8時15分、広島に世界で初めて原子爆弾が投下されました。その原爆の強烈な熱線により、多くの人々が重度の火傷を負い、亡くなりました。そのときの原爆地周辺の地表温度は、3000～4000℃に達したといわれています。

原爆による被害はそれだけではなく、原爆からは大量の放射線が放出され、人体に深刻な障害を及ぼしました。発生したエネルギーのうち、5%が「初期放射線」、10%が「残留放射線」となり、爆心地から約1キロメートル以内にいた人は放射線による致命的な影響を受け、多くの方が数日のうちに亡くなりました。また、無傷と思われた人たちも、月日が経過してから発病し、亡くなった例も多くあります。さらに原爆は、長時間にわたって残留放射線を地上に残したため、肉親や同僚などを捜したり、救護活動のために被爆後に入市した人の中には、直接被爆した人と同じように発病したり、亡くなる人もいました。原爆投下から1年後の1946年には、火傷が治った痕が盛り上がるケロイド症状や、母親の胎内で被爆した胎内被爆児の出生後の死亡率が高いほか、小頭症などの症状が現れることもありました。1950年頃には白血病患者が増加し、1955年頃からは甲状腺ガン、乳ガン、肺ガンなど悪性腫瘍の発生率が高くなり始めました。



吉村吉助氏絵

(2) 黒い雨について

広島では原爆投下後、「黒い雨」が降りました。黒い雨とは、原子爆弾炸裂時の泥やほこり、すすなどを含んだ重油のような粘り気のある大粒の雨で、放射性降下物の一種です。この黒い雨は強い放射能を帯びているため、この雨に直接打たれた者は、頭髮の脱毛や、歯ぐきからの大量の出血、血便、急性白血病による大量の吐血などの急性放射線障害をきたしました。

また、大火傷・大怪我をおった被爆者達はこの雨が有害なものと知らず、喉の渇きから口にするものも多かったといえます。そのため、今まで何の異常もなく元気であったにもかかわらず、突然死亡する者が多く出ました。水は汚染され、川の魚はことごとく死んで浮き上がり、この地域の井戸水を飲用した者の中では、下痢をすることが非常に多かったといえます。

原爆投下は、広島に多くの被害をもたらしました。日本は、世界で唯一の被爆国として、原爆の被害や惨状を世界に発信していく必要があると思います。

【参考】

広島市ホームページ／「黒い雨」訴訟を支援する会／広島平和記念資料館ホームページ

2. 学びの記録「広島平和記念式典」

広島派遣二日目、広島平和記念式典に参加してきました。
式典には92か国の国の代表が参列しているとともに、安倍総理、広島市長、こども代表などが、平和宣言をしていました。

原爆投下から74年、静粛な雰囲気の中行われた式典には、多くの外国人が参加していて、世界中で平和への関心が高まっているのだと感じました。こども代表は、自分の周りを平和にすることは、私たち子どもにもできることだと言っていて、私にも何かできることはないかと考えさせられました。

また、安倍総理は、被爆者から伝えられた被爆体験をしっかりと若い世代へと語り継ぎ、長崎や広島にきた外国人に伝えることが大切だと言っていました。

しかし、実際に被爆体験をしていない私たちや、言葉や文化の違う外国人が被爆者の思いを完全に理解することはとても大変なことだと思います。ですが、少しでも多くの人に関心を持ち、理解しようと努めることによって、世界平和の実現につながるのではないかと思います。



広島で起きた悲慘な過去を悲慘な過去のみで終わらせないために今私たちが生きている平和な世の中を大切に、戦争のない世界を実現できればいいと思います。



3. 学びの報告

私は、この広島派遣に参加するまで、原爆については、ほとんど知りませんでした。しかし、今回の広島派遣で実際に現地に行き、原爆のもたらした被害や原爆の恐ろしさ、被爆者の思いを目で見て肌で感じることができました。そして平和を実現するための様々な取組を知ることができ、とても充実した3日間を過ごすことができました。

平和とは、争いごとがなく普通に毎日を過ごせることです。しかし、世界に目を向けると、まだ平和とは言えない国がたくさんあり、核兵器も存在しています。こうした事実を受け止め、広島で起こった出来事を決して忘れず、戦争のない世の中を目指して毎日を生きていくことが大切だと思います。

そのためには、まず、私たちの身近で起きている、学校や社会でのいじめ問題や、様々な事件等、身近な問題から視野を向け、周囲の人と力を合わせ、解決策を考えていくことが大切だと思います。そして、私が広島で学んできたことを無駄にしないように少しでも多くの人々に平和とは何かを、今後伝えていきたいと思っています。

戦争で失われた命の代償によって、私達が日常を平和に過ごせているので、被災された方々の苦しみを忘れてはいけないと思います。今こうして平和に過ごせているのは、私を取り巻く周囲の皆さんのおかげです。そして皆さんへの感謝の気持ちを忘れずに、生きていこうと思います。



1. 事前学習「広島原爆投下の背景」

(1) 原爆を投下した理由

アメリカ合衆国連邦政府による公式説明によると、太平洋戦争における日本列島本土での上陸直接戦闘を避け、早くに決着をつけるために、原子爆弾が使用されたとする。第二次世界大戦後の世界覇権を狙うアメリカが、原子爆弾を実戦使用することによりその国力・軍事力を世界に誇示する戦略であったとする説や、併せてその放射線障害の人体実験を行うためであったという説があり、広島にはウラン型、長崎へはプルトニウム型とそれぞれ違うタイプの原子爆弾が使用された。

(2) 原爆投下の背景、経路

原爆投下の6年前のルーズベルト大統領に届けられた科学者たちの手紙にさかのぼると、マンハッタン計画により開発中であった原子爆弾の使用対象として日本が決定されたのは1943年5月であった。一方で、具体的に広島市が目標と決定されたのは1945年5月10日であり、長崎市は7月24日に予備目標地として決定された。また、京都市や新潟市や小倉市などが候補地とされていた。

(3) 原子爆弾投下都市の選定経緯

広島と長崎が原子爆弾による攻撃目標となった経緯は、日本の各都市への精密爆撃が続けられる中で、1943年5月5日軍事政策委員会、最初の原子爆弾使用について議論され、トラック島に集結する日本艦隊に投下するのがよいというのが多くの意見があった。1945年5月28日、第3回目標選定委員会が開かれた次のことが決定された。

- 1、投下地点は、気象条件によって都度、基地で決定する。
- 2、投下地点は、工業地域の位置に限定しない。
- 3、投下地点は、都市の中心に投下するよう努めて、1発で完全に破壊する。

■調べてみての感想

今回調べてみて、長崎と広島以外にも原爆を投下しようと、計画していた地域があったと分かりました。そこに自分が住んでいる新潟県も入っていたということを知りました。投下された広島や長崎の人達は、今も戦争の後遺症で心に傷を負いながら生活をしている人がいると思います。教科書でしか学ぶことができなかった戦争の悲惨さ、平和のありがたさを、広島の地で感じ取り、多くの人に伝えていきたいと思います。

【参考】

日本への原子爆弾投下出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

2.学びの記録「被爆体験講話」

広島派遣一日目、被爆された伊藤瑠美子さんから当時の様子や疎開中の話、原爆投下後の広島の話などを聞かせていただきました。伊藤さんは、8月6日の爆心地から15キロのところにある小学校の校庭で朝礼中に原爆投下を目撃しました。16日、広島中心部を通して避難先に行った入市被爆者です。

伊藤さんの話の中で心に残っていることは、学校の先生が家族の安否確認をしてくれ、伊藤さんには、「家まで行けなかったけど、あたり一面なにもなかったから家族のことはあきらめなさい。」と言ったそうです。しかし、以前から「子供を残して死なないから」と言っていた母の言葉を思い出し、生きていると信じ待ったそうです。待っている時の伊藤さんの不安とわずかな期待、複雑な思いを想像して心が痛くなりました。

数日後、母を見つけることができたのに、周りの友達の家族は亡くなっていることから、本当のことを言えなかった、と伊藤さんの優しき、こんなに苦しい中でも人を思う気持ちに、自分だったらこんなに強い人間になれたらと思うと思いました。



3.学びの報告

広島原爆については授業で習ったことだけの“歴史”としての意識しかありませんでした。

しかし、今回被爆74年を迎える広島に初めて立ち、被爆者の方の思いを知ることができました。核兵器のない世界を求める市民や、被爆者の方の願いは世界平和に一步一步進んでいます。その一方で、いまだ世界では核をめぐる緊張が続いています。被爆者が亡くなっていくことや、高齢化する中で、戦争を知らない私たちの世代、またその次の世代に広島をどう伝えていくかが課題であると感じました。

今回の派遣で、被爆を体験された方のお話を聞いたり、資料館に行き遺品を見たりして、その惨状に言葉を失うことだらけでした。今の自分の“幸せ”という価値観は間違っていないだろうかと考えさせられました。そして、戦争を知らない私たちの世代は、もっと戦争で失うものの多さを想像しなければいけないと思いました。私は、戦争時代に、苦しい思いをしながら、必死に生きていた人たちのことを想像しました。自分がもしあの時代に生まれていたらと思うと怖くて仕方がなかったです。しかし、それ以上の恐怖を実際感じた人がたくさんいて、大切な人を亡くしたり、後遺症で苦しみ続けたり、自分の想像以上の、悲しみ、恐怖であったのだらうと思います。この苦しみは、被爆者の方にしか分からないと思います。だからこそ、これからもずっと、私たちは、想像しなければいけないと感じました。

この悲しい歴史を絶対に忘れず、被爆の記憶を未来に伝えていきます。被爆者の方々が必死で“平和”を訴えていることを忘れずに生きていきたいです。

私は、派遣をさせてもらって学んだこと、感じたことを一人でも多くの人に伝えていきます。被爆された方が二度と悲しまない未来のために平和への導きを伝えていくことを続けていきたいと思っています。そして、誰もが未来に向かって夢と希望をもてる世界になってほしいと思います。



1.事前学習「現在の世界情勢」

【1】2018年からの世界情勢

北朝鮮は去年9月に6回目の核実験をしました。アメリカの首都ワシントンまで射程に含める大陸間弾道ミサイルの発射実験も行いました。

これに対して、トランプアメリカ大統領は正恩氏を「小さなロケットマン」と挑発し「あらゆる選択肢がある」と話しました。原子力空母3隻を朝鮮半島の近海に送るなど強い態度を示すことで、核・ミサイル開発をやめさせようとしていたそうです。国連など制裁も強化され、北朝鮮の経済は苦しくなっていました。

2019年では、アメリカと中国の覇権争いが今後の不安要因になるようです。また、貿易紛争も長期化する恐れがあるそうです。[朝日中高生新聞]

7月末から8月初旬にかけて、北朝鮮が短距離弾道ミサイルと見られる飛しう体を6発発射しており不安が大きいです。

【2】現在起きている武力衝突による紛争

●アフガニスタン戦争

この戦争は、タリバーン等の反政府武装勢力によるテロや襲撃が、1978年から現在まで40年以上断続的に続いているものです。外務省が発表している海外安全ホームページでも、現在アフガニスタン全土に対して最も高い危険「退避勧告」が出ています。一般市民や外国人も巻き込まれる事件が相次いでいます。

●シリア内戦

「21世紀最大の人道危機」と言われるシリア内戦です。この国もアフガニスタンと同じく最も高い危険「退避勧告」が出ています。2011年から始まり、今なお続いていて、民主化を求める市民と、大統領のアサド氏による政権との対立は、やがて武力を伴う紛争へと発展しました。アサド政権と反体制諸派のそれぞれを支援するために様々な国や組織が介入し、紛争は複雑化・長期化していますが、今では終りが見えてきているようです。

●コンゴ内戦

第二次世界大戦以降に起きた紛争で、死者540万人という最も多い犠牲者を出している国、コンゴ。コンゴ紛争によって犠牲となった540万人の9割以上は、直接的な戦闘によるものではなく、病気や飢えが原因で亡くなっており、紛争は複雑化・長期化しています。

戦闘で命を落とすだけでなく、病気や飢えでの死因が9割以上だということにとっても驚き、私たちがとても平和で安全な環境にいるのだと改めて感じます。

【参考】

朝日中高生新聞、きふるホームページ

『世界一死者が多い紛争地域で戦うことも兵と長引く戦争。』



2.学びの記録「ヒロシマの心を世界に 2019」

【1】広島国際会議場フェニックスホール ひろしま子ども平和の集い

私たちは本来 10:00~12:00 のものを 10:00~11:00 頃まで見る事ができました。13 ある発表を 7 つ見られました。最後までは見ることができませんでしたが、一個一個の発表が個性的でまた機会があれば行ってみたいと思いました。中高生だけでなく、小学生も発表しに来ていて驚きました。私たちが見ることができたのは主に広島市内の学校や広島市内で活動している方たちでした。しかし後半の 6~12 は他県の平和大使や学校の代表者たちでそのうちの 2 つを見ることができました。どの発表も心にもものすごく響いてきました。一回見ると毎年見に行きたくなるような発表が多かったです。

【2】14:00~15:00 平和・原爆をテーマとした演劇『またあいましょう』

これは広島市立舟入高等学校の演劇部の皆さんが演じていました。ここ最近、舟入高校の演劇部が毎年行っているそうです。とても話の中に入り込んで見入ってしまいました。この発表も機会があればまた見に行きたいと思います。

こういった形で戦争や原爆について残していくということは大変な部分もあると思いますが、是非とも残していってほしいと思いました。



舟入高等学校演劇部の『またあいましょう』はこの二つの本を須崎幸彦さんが脚本にしたものです。左が佐伯敏子さんの本、右が堀川恵子さんの本です。



3.学びの報告

この3日間とても貴重な経験をたくさんさせてもらいました。一つ一つの活動がとても濃く、新たな知識を得た喜びと戦争に対する嫌悪感の相反する感情が私の心の中でぐるぐると渦巻いていました。一日一日が印象強く、一生忘れることは無いと思います。

どの活動でも共通して感じるがありました。それは広島の人たちの力強さとあたたかさです。あれだけ辛いことが過去にありながらも、それを後世の人たちにしっかり伝えるべくガイドを行ったり、体験講話を行ったり、そういった力強さとあたたかさを持っている広島の方々に多く出会うことができました。この経験は実際に広島に行って広島の方々と会話をして、交流をしたからこそその物だと思います。

この灯籠流しには様々な国から多くの外国人もいて、とても多くの方々が参加されていました。灯籠にも日本語以外の物も多く世界中の方々が平和や原爆、広島に思いを寄せていることがとても伝わってきました。



今こうして私たちが平和で安全な場所で生活できているのには多くの亡くなった方、苦しんでいた方、苦しんでいる方などがいることをなしには考えられないと思います。こういったことを私たちは忘れてはいけないと強く感じました。そして若い世代、未来を創る世代の人たちに語り継がなければいけないと思いました。実際に戦争、原爆を体験した方々は年々少なくなっています。こういったことから私たち若い世代が自ら広島へ赴き、多くを学びそれを発信していくべきだと感じました。

いずれ戦争のない、核兵器のない世界になるように自分に何ができるのか。それを常に考えるべきだと思います。考えるだけでなくその考えを共有して共に如何にして平和な世界にするのか。方法や手段を考え行動に移すまでが大切だと思います。私たち一人一人の力や影響は小さいかもしれないけれど、それを共有して共に考え行動することで様々な輪ができあがり、その輪が一つになったときに世界に平和が訪れるときだと思います。

1.事前学習「太平洋戦争戦時下の生活」

□太平洋戦争の状況



日本で第二次世界大戦(太平洋戦争)の開戦が始まると、日本の戦時体制はさらに強化されました。戦時体制とは、国民の生活よりも戦争に費用や物資が優先される体制のことです。

太平洋戦争は日本がアメリカの真珠湾にある基地を奇襲したことで始まったので、最初は日本が優勢でした。しかし、1942年のミッドウェー海戦で大量の兵力を投入したにもかかわらず敗北し、戦況が不利になりました。その後サイパン島が陥落し、本土空襲が始まると国民も敗戦の雰囲気を感じ始めました。それでも男性は兵として、女性は労働者として国のために働き続けました。

□太平洋戦争の裏で国民は・・・

日本が戦時体制になると、国民の生活も大きく一変しました。国民全体の食事が配給制になり、「ぜいたくは敵だ」というスローガンが広まりました。また子供が戦争の地から離れた場所に疎開し、家族と離れた暮らしで辛い思いをしました。また、男性が戦争へいっているため、国の必需品を製造するなどの労働は女学生が担うことになりました。このように、日本が戦争を行っている間は家族同士が離れ離れになってしまい、今では考えられない生活を戦争時は過ごしていました。



報道では日本が優勢だと伝えられて、国民はどんな状況でも勝てると信じていました。それが戦争を長引かせた大きな原因だと考えられます。

2.学びの記録「広島平和記念資料館」

□概要

広島派遣一日目に広島平和記念資料館を訪れました。館内には主に原爆投下の被害を写す写真や戦争の悲惨さや辛さなどを体現した絵などが展示されていました。また、館内の展示物の前ではそれぞれ説明のアナウンスを聞くことができ、とてもわかりやすく見学することができました。

□館内を見て…

軍服からでも想像できる痛々しい傷。今にも泣きそうな目をした傷だらけの少女など。私はそれまで戦争の映像は幾度と見てきました。映像は一連の動作を



見ることで写真や絵などよりも分かりやすく、ダイレクトに伝わってくると思っていました。しかし、今回館内を見て、写真や絵は音や動きがないからこそ見ている人の想像を掻き立て、より強く心に訴えてくるものがあると感じました。実際に見学して、深い傷の痛みや死を恐れる人々の気持ちが伝わってきました。

また、戦争の悲劇は戦時中だけでは終わりませんでした。それは原爆が投下された翌日、家族を探しに行った人々が放射線によって病を発症しました。

そして多くの人に同じような症状が出たため感染症の類だと診断されました。そのため社会から隔離され、家族と離れ離れにならなければならず、その絶望や孤独感は私の想像をはるかに超えるものだったと思います。



□これからの世代に伝えられること

私は戦争を体験していません。だから戦争体験者の痛みや辛さを本当の意味で理解できないかもしれません。でも体験していない僕たちだからこそできる事もあります。それは、この広島派遣で学んだ戦争の悲惨さや戦争体験者の痛みや苦しみ、そして何よりも命の尊さを伝えることです。

戦争体験者の高齢化が進む中で、実際に体験者から聞いたお話は貴重な体験でした。これを自分の言葉で一人でも多くの人に伝え、後世に語り継いでいくことが平和な世界を築いていく為の一步だと思いました。

3.学びの報告

□平和とは…

僕はこの三日間で実際に戦争の悲惨さを目の当たりにして、改めて「平和とは何なのか」ということを深く考えました。平和とは私達の日常から考えると当たり前のように思っていたのですが、この研修を通して多くの犠牲の上に成り立っているのだと改めて感じました。

—————自分にとって平和とは笑顔でいられること—————

当時は戦争に勝つことばかりで生きて家族のもとに帰ることもできない辛い日々が続いたと思うと、いつも笑顔でいられる現在の平和な毎日は本当に幸せです。

しかし、その平和は広島に原爆が投下された時のように一瞬で崩れ去ります。このように平和と死を対とするなら、たった一つの行動でそれはどちらかに傾いてしまいます。些細な行き違いやトラブルで悲惨な結果を生まないために私たちの行動一つ一つに責任を持たなければならないと思いました。

□戦争から平和へ

この広島派遣で僕にはとても印象に残っている建物があります。それは原爆ドームです。初めはそれが戦争の状況を伝える為のドームだと思っていました。当時は原爆ドームを残すか残さないかで大議論になりましたが、後世に伝え多くの人に原爆の被害を知ってもらいたいということで残されました。そして現在まで日本だけでなく多くの外国人が訪れています。私はそんな原爆ドームを毎日いろんな姿で写真に収めました。そして最終日、青い空と写る原爆ドームは戦争の悲惨さを伝えるのと同時に平和の象徴としての役割も果たしているのだと思いました。



□まとめ

この広島派遣では戦争時の状況や戦死者の気持ちだけでなく、自分のこれからへの生き方を考えさせられた気がしました。派遣の前は戦争を歴史上の出来事で、全く身近なことだと思っていませんでした。しかし、この一連の戦争は約七十年前に実際に日本で起きたことなのだと改めて実感しました。

しかし、以前より平和だと言っても今の日本と外国との関係を考えれば戦争が絶対に起きないとは言いきれません。これからそんな悲惨な戦争で誰も悲しまないために、広島で学んだことを多くの人達に私たちが伝えていかなければならないと思いました。

1.事前学習「戦後の復興」

核兵器を減らそうとする動き

1954（昭和29）年3月1日、アメリカが太平洋のビキニ環礁で水爆実験を行い、遠洋まぐろ漁船の第五福竜丸が放射線を出す「死の灰」を浴び、その年の9月には乗組員が1人亡くなりました。この事件をきっかけに翌年には原水爆禁止世界大会が開かれ、14か国52人の海外代表を含む5,000人以上が参加しました

日本は1967年に「核兵器をつくらない、もたない、もちこませない」と決めました。世界でただ1つ原子爆弾を落とされた国として核兵器をなくすように世界に向けて訴えていくことが大切です。

2017（平成29）年7月7日、国連で核兵器を「非人道兵器」としてその開発、保有、使用などを禁止した「核兵器禁止条約」が122か国の賛成により、採択されました。この条約が世界のルールとなり核兵器をなくす方向に進むことが期待されています。



2.学びの記録「広島平和記念公園」

広島派遣二日目、公園内案内ボランティアの方々から案内していただきながら広島平和記念公園を見学しました。

○原爆ドーム

1915年（大正4年）の4月、チェコの建築家ヤン・レツルの設計により建てられました。当時は、広島県産業奨励館と呼ばれていました。そして、1945年8月6日の原爆投下によって爆風と熱のために鉄骨はむき出しになっており、実際に見て原爆の怖さを感じました。世界平和、日本の平和の象徴である原爆ドームは今もありのままの姿で残されています。

私は原爆ドームが受けた被害を形に残すことで海外から来た人にも悲惨さがよく伝わるのではないかと思います。

○原爆の子の像

原爆の子の像のモデルであり、原爆の被害者である佐々木禎子さんの同級生によって作られた像です。各地から寄せられた募金によって「原爆の子の像」が完成しました。

2才で被爆し、12才で白血病のために亡くなった禎子さん、その像は禎子さんの魂の叫びでもあると思います。

犠牲になった多くの人々の思いを後世に伝えていくのが私達の使命だと思います。



3.学びの報告

私は現地でしか聞けないこと、見られないことを体験することができました。その中でも特に原爆ドームが印象に残っています。資料館で被害を受ける前と被害を受けた後の原爆ドームの模型を見て、「元の形はこんなに大きかったの！」ととても驚きました。教科書で見る原爆ドームとは違い、生で見て原爆の怖さ、戦争の悲惨さを痛感しました。

今でも世界で核兵器がある国があります。核兵器のない平和な世界を目指していくために今私達ができることは、平和に暮らせることに感謝し、一日一日を大切に生きることです。

明日、突然原爆が投下されたと考えると怖くてなりません。平和に過ごせる事に感謝して、大切に生きることが平和な世界の実現への第一歩だと思います。

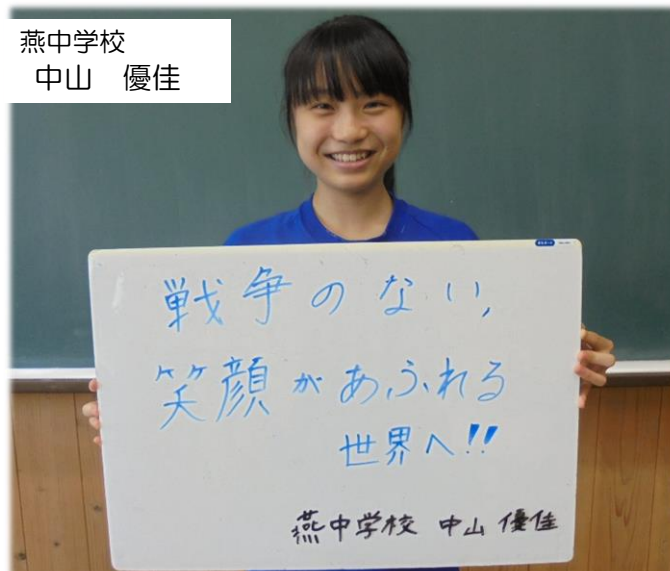
また、たくさんの方が現地である広島を訪れ、平和な世界を願い、平和の大切さ、原爆の悲惨さを感じることができるよう人が増えてほしいと思います。

核兵器のない平和な未来がずっと続くことを願っています。

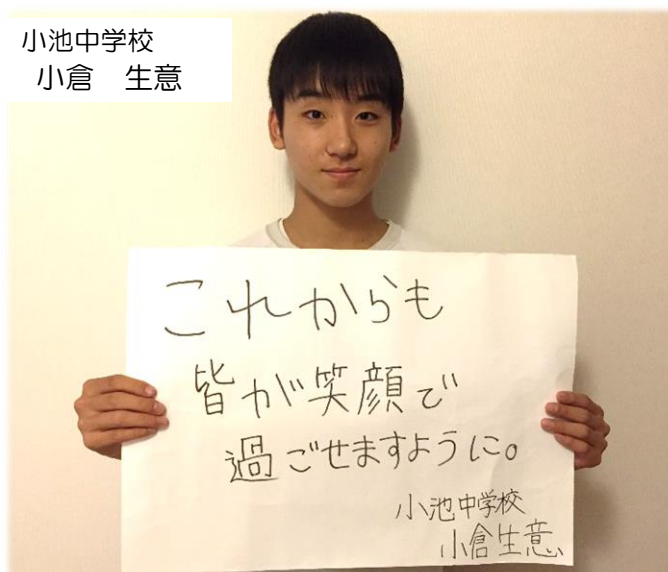


平和への誓い in 燕

燕中学校
中山 優佳



小池中学校
小倉 生意



燕北中学校
沼澤 すみれ



吉田中学校
相田 漱哉



分水中学校
廣瀬 葵



平和を願うことは、明るい未来を願うこと
私たちはこれからも伝え続けます
平和と命の尊さを

明るい未来のために

(引率者) 学校教育課 小池 克行

雨の中行われた広島平和記念式典。このような悪天候の中行われるのは、久しぶりのことでした。会場となった平和記念公園は、世界中から集まった平和を願う多くの人々であふれてはいましたが、昨日までの喧騒とはうって変わって、静寂に包まれていました。燕市の平和大使5名も、壇上からの声に必死に耳を傾け、多くの参列者の向こうに垣間見える姿に真剣な眼差しを向けていました。



今世界では自国第一主義が台頭し、国家間の排他的、対立的な動きが緊張関係を高め、核兵器廃絶への動きも停滞しています。このような世界情勢を、皆さんはどう受け止めますか。二度の世界大戦を経験した私たちの先輩が、決して戦争を起こさない理想の世界を目指し、国際的な協調体制の構築を誓ったことを、私たちは今一度思い出し、人類の存続に向け、理想の世界を目指す必要があるのではないのでしょうか。

特に、次代を担う戦争を知らない若い人にこのことを訴えたい。そして、そのためにも1945年8月6日を体験した被爆者の声を聴いてほしいのです。

当時5歳だった女性は、こんな歌を詠んでいます。

「おかつぱの頭から流るる血しぶきに 妹抱きて母は阿修羅に」

また、「男女の区別さえ出来ない人々が、衣類は焼けただれて裸同然。髪の毛も無く、目玉は飛び出て、唇も耳も引きちぎられたような人、顔面の皮膚も垂れ下がり、全身、血まみれの人、人。」という惨状を18歳で体験した男性は、「絶対にあのようなことを後世の人たちに体験させてはならない。私たちのこの苦痛は、もう私たちだけでよい。」と訴えています。

生き延びたものの心身に深刻な傷を負い続ける被爆者のこうした訴えが皆さんに届いていますか。

「一人の人間の力は小さく弱くても、一人一人が平和を望むことで、戦争

を起こそうとする力を食い止めることができると信じています。」という当時
15歳だった女性の信条を単なる願いに終わらせてよいのでしょうか。(後略)

平和宣言 広島市長 松井 一實



平和は誰の手でもなく、私たち
一人一人の努力によって実現し
ていることにあらためて気付く
ことができました。そして、いつ
までもこの平和な社会が続いて
いくためにも、過去の悲惨な体験
を決して忘れてはいけなと強く感じました。

平和な未来の実現に向けて、平和大使5名がその中心となってくれることを
期待しています。広島での貴重な学びを、さらに価値あるものへと深化させて
いくことを信じています。



これからを想うこと

(引率者) 学校教育課 小川 綾花

広島市へは、5名の平和大使と同じく、私も初めての訪問でした。訪問前に戦争時下の様子や原爆の被害、惨状等の事前学習を平和大使にお願いしており、それに伴い、私も広島のことをいくつか調べていました。広島へ到着したとき、街には路面電車がいくつも走り、とてもにぎやかで、事前に調べていた惨状とはあまりにもかけ離れた様子に、ここで戦争があったことはどこか遠くの話に感じている部分もありました。しかし、そんな気持ちはすぐに小さくなっていきます。きっかけは、被爆体験講話で講師の伊藤瑠美子さんから、疎開先でのお話を聞いていたことからです。

「その日の朝は快晴でした。学校に疎開していた皆で校庭に並んで朝礼に出ていたときのこと。誰かが、B29が飛んできたと言い、偵察機だと思って見ていたら、何か光るものを落としたの。あれはなんだろうと思って、みんなで見えていました。そうしたら、急に目も開けられないほどまぶしくなって、それから少し遅れてものすごい爆音がしました。それが原子爆弾というものだったのだと、後で知りました。」



原子爆弾は、上空で投下されてから炸裂まで、およそ43秒間の落下時間があります。広島を焦土へと変えたものが原子爆弾だと、日本が知り得たのは早くとも8月7日であり、新聞では11日に報道されました。8月6日の朝、B29が落としたものが、隣にいる友人や、家族、ふるさとを一瞬にして奪うものだと、その場にいた誰が想像できたのでしょうか。それを、何も知らずに皆で43秒間見ていたとの生々しい光景を想像したら、心臓が握り潰される思いがしました。

その後、移動の間に原爆ドームを間近に見ることができました。爆風の圧力で曲がった太い鉄筋の枠組みがむき出しになっている当時のままの姿から、ここでも生々しく、戦争があったことが伝わってきました。そこから、平和記念公園へと入る途中、夏の暑さがじりじりと肌を焼いてきましたが、公園内は豊かな木々が所々に木陰を作り、暑さと心を和らげてくれました。

原子爆弾投下後、爆心地からおよそ半径2.5Kmはすべてを破壊され、焼け野原となりましたが、わずか3日後には再び路面電車が走ったと言います。絶望の中にありながらも、市民は力強く立ち上がり、復興に向けて住宅を建設し、学校を再開しました。そして翌年には『これから』の広島市に必要な道路や公園などを盛り込んだ広島復興都市計画を決定し、都市づくりを始めています。被爆後75年は草木も生えないと言われていた都市は、かつての景観を取り戻そうと始まった植樹のおかげで、74年経った現在では緑が豊かに根付いています。



市内には、爆心地や原爆ドーム、慰霊碑など所々に、悲惨な過去の影が見えます。被爆体験をお話しくくださった伊藤さんも、当時のことはきっと思い出したくもないことだっただろうと思います。ですが、語っていくことや、当時のまま大切に保管されている資料、豊かな木々、街のにぎやかさ、そして広島で出会った皆さんの優しさの一つ一つが、あの日から受け継がれて

てきた『これから』への想いだと感じました。

平和大使の皆さんも、広島で経験したことや感じた想いを『これから』にきくと繋いでくれると思っています。

最後になりますが、皆さんと共に貴重な体験をし、過ごせたことに深く感謝いたします。本当に、ありがとうございました。

平和への誓い

私たちは、広島町が大好きです。
ゆったりと流れる川、美しい自然、
「おかえり。」と声をかけてくれる地域の人、
どんなときでも前を向いて生きる人々。
広島には、私たちの大切なものがあふれています。

昭和20年（1945年）8月6日。
あの日から、血で染まった川、がれきの山、皮膚がはがれた人、たくさんの亡骸、
見たくなくても目に飛び込んでくる、地獄のような光景が広がったのです。
大好きな町の「悲惨な過去」です。
被爆者は語ります。「戦争は忘れることのできない特別なもの」だと。

私たちは、大切なものを奪われた被爆者の魂の叫びを受け止め、
次の世代や世界中の人たちに伝え続けたい。
「悲惨な過去」を「悲惨な過去」のままで終わらせないために。
二度と戦争をおこさない未来にするために。

国や文化や歴史、
違いはたくさんあるけれど、大切なもの、大切な人を思う気持ちは同じです。
みんなの「大切」を守りたい。

「ありがとう。」や「ごめんね。」の言葉で認め合い許しあうこと、
寄り添い、助け合うこと、
相手を知り、違いを理解しようと努力すること。
自分の周りを平和にすることは、私たち子どもにもできることです。

大好きな広島に学ぶ私たちは、
互いに思いを伝え合い、相手の立場に立って考えます。
意志をもって学び続けます。
被爆者の思いに、私たちの思いを重ねて、平和への思いを世界につなげます。

令和元年（2019年）8月6日 こども代表

派遣事業の概要

派遣事業の概要は次のとおり。目的を理解し、有意義な学習活動となるよう留意する。

(1) 目的

非核平和宣言都市推進事業および平和学習活動実施の一環として、広島平和記念式典をはじめとするさまざまな催しに、次代を担う中学生を派遣することにより、国際的な視点で命の尊厳や平和の尊さについて理解できる生徒を育成すること。

(2) 主な活動内容

- ①広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式への参列
- ②広島平和記念資料館、原爆ドーム、原爆死没者慰霊碑等の見学
- ③原爆の子の像に各校で制作した千羽鶴を奉納
- ④被爆体験講話の受講
- ⑤とうろう流しへの参加
- ⑥市民への報告（市内会場で報告会を実施）
- ⑦全校生徒への報告（2学期に各学校で報告会等を実施）
- ⑧報告書の提出

広島派遣時

派遣後

1. 派遣事業参加中の役割分担

自主的な学習活動を進めるため、役割分担をする。

役割分担の内容		氏 名 (中 学)
(1)	ミーティング・被爆体験講話司会	相田 湊哉 (吉田中)
(2)	記録（見学・訪問先等）	沼澤 すみれ (燕北中)
		廣瀬 葵 (分水中)
(3)	被爆体験講話講師へお礼のことば	小倉 生意 (小池中)
(4)	引率者との連絡調整	中山 優佳 (燕 中)

2. 学習の過程および分担

より有意義な体験にし、各学校の全校生徒へより効果的に伝えるため、「事前の学習」、「学びの記録」、「学びの報告」という3ステップで学習活動を進める。

(1) 事前の学習

事前に以下のことについて学習し、より充実した体験とする。

- | | |
|--------------|---------------|
| ①日程および資料の確認 | (担当： 全 員) |
| ②被爆体験者への質問 | (担当： 全 員) |
| ③太平洋戦争戦時下の生活 | (担当： 相田 湊哉) |
| ④広島原爆投下の背景 | (担当： 小倉 生意) |
| ⑤原爆の被害・惨状 | (担当： 中山 優佳) |
| ⑥戦後の復興 | (担当： 廣瀬 葵) |
| ⑦現在の世界情勢 | (担当： 沼澤 すみれ) |

(2) 学びの記録

以下の項目について担当がそれぞれレポートとしてまとめる。

- | | | |
|------------|-------------------|---------------|
| 広島での
学び | ① 広島平和記念公園 | (担当： 廣瀬 葵) |
| | ② 広島平和記念資料館 | (担当： 相田 湊哉) |
| | ③ ヒロシマの心を世界に 2019 | (担当： 沼澤 すみれ) |
| | ④ 被爆体験講話 | (担当： 小倉 生意) |
| | ⑤ 広島平和記念式典 | (担当： 中山 優佳) |
- (広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式)

(3) 学びの報告（まとめ）

参加前の学習や実際に3日間の研修に参加して得たものや感じたこと、また、これらの経験を受けて、全校生徒や周りの人に伝えたいことをまとめる。

3. 広島平和記念式典派遣事業報告会

日 時：9月1日（日）午後1時30分から2時30分

場 所：燕市役所 つばめホール

広島平和記念式典派遣事業の様子



各校で千羽鶴の作成



出発式



被爆体験講話



広島平和記念資料館へ



千羽鶴の奉納



ヒロシマの心を
世界に2019 見学



とうろうに祈りをこめて



広島平和記念式典会場にて



広島平和記念公園散策



被爆体験記朗
読会会場にて



報告会の様子
(約 100 名の方々がご来場くださいました)



報告会場入口にて
「原爆の絵」の写真を展示

被爆アオギリ二世

被爆アオギリ二世の親木のアオギリは、爆心地から北東 1.3 kmにある中国郵政局の中庭で被爆しました。爆心地側の幹半分が熱線と爆風により焼けてえぐられましたが、焦土の中で青々と芽を吹き返し、被爆者に生きる希望を与えました。その後、このアオギリは 1973(昭和 48)年に平和記念公園内に移植され、今でも樹皮が傷跡を包むようにして成長を続けています。

被爆アオギリ二世は、このアオギリの種から育てられたもので、「平和を愛する心」、「命あるものを大切にする心」を育み、平和の尊さを伝えるとともに、過ちを再び繰り返さないよう、被爆の実相を後世に伝えます。

燕 市 平成 30 年 4 月 植樹



令和元年度 広島平和記念式典派遣事業
平和大使 活動報告書

派遣期間：令和元年 8 月 5 日（月）～7 日（水）

燕市教育委員会学校教育課